

浄土を求める心

——欣慕・帰命・願生——

藤 嶽 明 信

浄土は、真実信心において開顯される世界である。そして、天親によれば、その信は帰命と願生ということでもって表白されている。それは、浄土とは、帰命と願生ということの内実とするところの信心に開かれてくるということであろう。それでは、帰命・願生の信心ということにおいて衆生に浄土が開顯されるとはどのようなことなのであるか。今回の論文は、そのことを「信巻」別序に示される沈迷の二機ということを手掛かりにしながら尋ねようとするものである。

一 欣慕ということ

親鸞が開顯しようとした仏道において、浄土とはいかな

る世界なのであるか。親鸞が明らかにしようとした仏道とは、法然との出会いにおいて領かれた仏道である。それは本願の仏道であり、本願成就の仏道である。『大無量寿經』下巻に説かれる本願成就文には、

諸有衆生、其の名号を聞きて、信心歓喜せんこと、乃至一念せん。至心に回向せしめたまえり。彼の国に生まれんと願ぜば、即ち往生を得、不退転に住せん。

〔真聖全〕一巻・二四頁

と説かれる。そこには、聞名において発起した信心、その念仏の信心における願生彼国ということが表されている。すなわち、念仏の信心において願生される彼国として、浄土が語られている。それは、阿弥陀仏の浄土とは、念仏の

信心ということを離れたところで想像されたり解釈されたりする世界ではない、ということを表すものである。そのことを、親鸞に先立って明示しているのが天親であろう。天親は、釈尊の教えにおいて発起した信心を、

世尊、我一心に、尽十方無碍光如来に帰命したてまつりて、安樂国に生ぜんと願ず。

〔真聖全〕一卷・二六九頁

と表白している。そこには、眞実信心、一心の内容として帰命と願生ということが語られている。帰命と願生を内実とした一心が発起したとき、天親に往生の一道が明らかとなったのである。

帰命とは、自己がそこにおいて生と死を尽くしてゆけるような、自己の依って立つべき畢竟の依処、すなわち畢竟依としての如来が明らかになるということである。願生とは、帰命ということをとおして、そこに往生すべき世界としての浄土が明らかになるということである。そして、そのことは言葉をかえていえば、帰命と願生ということを内実とした一心を生きる自己、そのような主体が誕生するということである。そのような眞実信心が発起するというところにおいてこそ、衆生に往生浄土としての救済の道が開かれてくるのである。

親鸞は、『教行信証』の「信巻」において眞実信心を開顕する。そこには、三心一心の問答を中心として、衆生に発起する一心帰命の信は、本願力回向成就であることが明かされてゆく。そのことは別序には、

夫れ以んみれば、信樂を獲得することは、如来選択の願心より発起す。真心を開闡することは、大聖矜哀の善巧より顕彰せり。〔真聖全〕二卷・四七頁

と述べられる。眞実信心は弥陀の本願に根拠をもつものである。そして、それは釈尊の教えによって衆生に開顕されるものである。その如来回向成就の信心を明らかにしていくにあたって、別序には続いて、

然るに、末代の道俗、近世の宗師、自性唯心に沈みて浄土の眞証を貶す。定散の自心に迷いて金剛の眞信に昏し。〔真聖全〕二卷・四七頁

と、沈迷の二機ということが出されている。これは、眞実信心に非ざる二機を示し、それを選ぶことがらとして眞実信心を明らかにしてゆくのである。

それでは、沈迷の二機とはいかなるものであろうか。それは、「末代の道俗、近世の宗師」という言葉からも窺えるように、また、

元祖の念仏為本の御教化をききて、三万六万の念仏を

称え、雜行をすてて正行を修めおるはよけれど、其安心を尋ねみれば、或は自性唯心の聖道門の安心に沈んでおるものもあり、或は定散自力の安心に止りて他力の安心を知らずに居るものが沢山ある。之に依て吾祖掟なく此信巻を御選述なさる。

『教行信証講義集成』五卷・四五頁

と述べられるように、直接的には法然の教えを受けた人々のなかにおける真実信心に異なるものを指すには違いなからう。親鸞はそういう現前の状況を見据えながら語っているのである。

しかし、沈迷の二機とは、単にそういう状況にあることがらというだけでなく、真実信心を開顯するとき、必然的に問題とされねばならないところのふたつのことがらということである。それは、天親が「世尊我一心 帰命尽十方 無礙光如来 願生安樂国」と表白したところの真実信心の内容としてある帰命と願生というに関わる問題を語るものではないであろうか。すなわち、沈迷の二機とは、帰命と願生ということを欠落したところの信心ということであろう。その二機とは、浄土や念仏ということを信奉するものにはちがいないが、それは帰命と願生という内実をとまわらないものである。

そしてまた、沈迷の二機とは、信心の問題には違いないが、そのことはそのまま浄土というところの問題でもあるのである。なぜなら、自性唯心に沈むというところでは、「浄土の真証を貶す」という浄土についての問題が語られている。さらには、定散の自心に迷うということにも、やはり浄土ということにかかわる問題があるといえよう。

すなわち、自性唯心に沈むとは、浄土に往生するということを願うということがないところの浄土の了解である。いわばそれは、願生を欠落した信心である。定散の自心に迷うとは、そこには浄土を慕い願うということはある。しかしそれは、如来に帰するということをくぐらないところのものである。いわばそれは、帰命を欠いたところの願求であり、信心である。その様な沈迷の二機に選ばれることがらとしてあるのが真実信心なのであり、真実信心とは、まさしく帰命と願生を内実としたところの一心であるといえよう。そして、その真実信心において開示されるのが真実の浄土なのである。それでは、沈迷の二機ということとは、具体的にはどのような問題性をもつものなのだろうか。まず初めに示されているのが、自性唯心に沈むということである。自性唯心とは、

世有専於參禪者云。惟心浄土。豈復更有浄土。自性阿

弥。不必更見阿弥。『大正藏』四七卷・二五五頁c)

と述べられ、

凡愚不了自性。不識身中淨土。願東願西。悟人在処一般。『大正藏』四八卷・三五二頁a)

というところに表されているように、自分の心において浄土や阿弥陀仏を立て、心を離れて外に浄土も弥陀もないとするものである。それは、

己心の弥陀、唯心の浄土 『真聖全』三卷・八五頁

といわれるところのものである。

そして、『観経』に説かれる阿弥陀仏とその浄土も、このことに対して、徹底的な批判をしていたのが善導である。善導は、阿弥陀仏の浄土は、己心の弥陀・唯心の浄土というようなことではなく、まさしく本願に酬報した報土であることを明らかにしていく。『観経』を註釈するうえでの、聖道の諸師と善導との異なりは、韋提希観や九品観など多岐にわたるのである。そのなかでも如来および浄土ということについては、第八像観についての注釈が注目されるべきであろう。

『観経』には、第八像観について、

次に当に仏を想すべし。所以はいかん。諸仏如来は、

これ法界身なり。一切衆生の心想の中に入る。この故に、汝等、心に仏を想う時、この心即ちこれ三十二相・八十随形好なり。この心作仏す。この心これ仏なり。諸仏正遍知海は、心想より生ず。この故に、当に一心に繫念し、諦かに彼の仏・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三仏陀を観ずべし。

『真聖全』一卷・五五〇五六頁
と説かれる。この經文を注釈するなかで、善導は、

いまこの観門は、等しく唯方を指し相を立てて、心を住せしめて、境を取らしむ。すべて無相離念を明かさずなり。『真聖全』一卷・五一九頁

という、指方立相ということをかかげている。そしてそのことは、

或は行者ありて、この一門の義をもって、唯識法身の観を作し、或は自性清淨仏性の観を作すは、其の意甚だ錯れり。絶えて少分も相似たること無しなり。

『真聖全』一卷・五一八頁

という、聖道門の諸師による浄土の了解というものに対しての強い批判のなかになされている。ここでいわれていることについて講録には、唯識法身の観について、

旧訳性宗に云う唯識は、如来藏心也。(中略)性宗に云

う唯識は方法ごとく真如心が随縁して起る処ゆえ如来藏心を離れて余法なしと云が唯識なり。今も己が真心を離れて弥陀なしと云を唯識法身觀とするが諸師也。

〔觀經四帖疏講義〕一卷・四六三頁

と述べられている。また、自性清淨仏性の觀については、自性清淨仏性とは、衆生本有の仏性なり。(中略)煩惱泥中に在てもけがれることなき本来自性清淨の仏性なり。今是心乃至仏と云は、自力仏性を觀すること也。仏性の外に仏なき故に今弥陀を觀ずるは仏性を觀ずる也。

〔觀經四帖疏講義〕一卷・四六三頁

といわれている。これらのことからわかるように、衆生の心の内に、真心や仏性という真実であるものを認め、そのことを離れて阿弥陀仏があるものではないとするものである。

そのような聖道門の諸師における阿弥陀仏や浄土の了解を、善導は厳しく批判してゆく。なぜ善導は、第八像觀を、無相理念の浄土などではなく、指方立相の浄土として了解してゆくのか。そのことについては、

如来、はるかに末代罪濁の凡夫を知らしめして、相を立て、心を住すとも、なお得ることあたわずと。何に況や、相を離れて事を求めんは、術通なき人、空に居

て舍を立てんがときなり。

〔真聖全〕一卷・五一九頁

と述べられているところに窺えよう。そこには、『觀經』が説かれなければならなかったところの衆生、すなわち、所彼の機についての深い自覚がある。そのことは、韋提希や九品についての、聖道の諸師と善導との了解の違いともなっているところの根本の問題である。『觀經』によって教えられ、救われていかねばならないのは誰なのか。どのような衆生であるのか。そのことに無自覚であるならば、經典はどのようににも任意に解釈されていく。善導は、仏によって教えられなければならないものとして、すなわち仏弟子として『觀經』を聞思していった。そこに、『觀經』に説かれる阿弥陀仏と浄土は、唯心の浄土とか、己心の弥陀とか、無相離念とかいうことではないと決着されていたのである。善導においては、『觀經』は徹底して凡夫に浄土を明らかにしようとするところの教えなのである。そこに浄土は、娑婆世界より觀て西方と指され、国土・仏・聖衆の相を弁立して表されていくのである。そして、凡夫がその浄土に心を専注して、その境を觀ずるということを教えるものなのである。

それでは、そのような凡夫に説かれる『觀經』の觀法と

は、凡夫のうえに何を実現しようとするものなのであるうか。善導は、『観経』に定善・散善を説く釈尊の意を、

また、決定して、深く釈迦仏この『観経』に三福九品・定散二善を説きて、彼の仏の依正二報を証讃して、人をして欣慕せしむと信ず。

〔真聖全〕一卷・五三四頁

と、衆生をして浄土を欣慕せしめるための教説であると述べている。それは、衆生にとって浄土とは、欣慕されるべき世界として教えられていることである。善導の著述のなかには、穢土を厭い浄土を欣うという厭欣ということの強調を見ることができる。例えば、

帰去来、魔郷には停まるべからず。曠劫よりこのかた六道に流転して、ことごとくみな径たり。到る処に余の樂なし。ただ愁歎の声をきく。この生平を畢えて後の涅槃の域に入らん。〔真聖全〕一卷・五〇四頁

といわれ、あるいは、

諸の行者に白さく。凡夫生死貪じて厭わざるべからず。弥陀の浄土軽しめて忻わざるべからず。厭えば則ち娑婆永く隔つ。忻えば則ち浄土に常に居せり。

〔真聖全〕一卷・七二六頁

と述べられる。これらの文からも窺えるように、善導にお

いて、浄土とは、唯心の浄土とか己心の弥陀とかということではなく、欣慕すべき世界であり、願生すべき西方の国土として、仏によって教えられたつある世界なのである。

それでは、浄土を欣慕するということは、衆生の救済ということにおいていかなる意義を持つものであるのだろうか。そのことを、『観経』の対告衆である韋提希における浄土の願求ということをとおして尋ねてみる。

韋提希は、阿闍世によって幽閉されることによって愁憂憔悴する。そしてその苦悩のなかで仏に遇うということにおいて、

やや願わくは世尊、我がために広く憂悩なき処を説きたまえ。我まさに往生すべし。閻浮提・濁惡世をば樂わざるなり。この濁惡処は地獄・餓鬼・畜生盈満し、不善の聚多し。願わくは我、未来に惡声を聞かじ。惡人を見じ。〔真聖全〕一卷・五〇頁

と、苦悩のない世界への往生を願う。このように、一人の人間の上に、苦悩の世界を厭い浄土を願うということが起こったということを、善導は、

これ夫人、自身の苦に遇いて、世の非常を覺るに、六道同じく然なり。安心の地あることなし。此に仏浄土の無生たるを説きたまうを聞きて、穢身を捨てて彼の

無為の樂を証せんと願ずることを明す。

『真聖全』一卷・四八五頁

と述べている。そこには大切な確かがなされている。すなわち韋提希は、自分自身の苦悩を縁として、この世界には自身が拠るべき確実なものなど何もないことに気付かされたのであり、六道という娑婆世界のどこも自己が安んずる世界でないということを知らされたのである。そしてそこに、真に自己が安んずることのできる世界としての彼の無為の浄土を願ったのである。しかしこのことは、釈尊の教えが人間に聞こえたということにおいて始めて起り得たことなのである。そして、このように、穢土を厭い浄土を願うということが、人間の上起こったということが、韋提希が救済されてゆくということにおける、極めて重要な一歩なのである。なぜなら、

諸仏、世に出で、種種の方便もて衆生を勧化したまうは、ただ惡を制し福を修して、人天の樂を受けしめんと欲するにあらずなり。人天の樂は、なおし電光のごとし。須臾にしてすなわち捨てて、還て三惡に入りて長時に苦を受く。此の因縁の爲に、ただ勧めすなわち浄土に生ずることを求めて、無上菩提に向はしめたまう。

『真聖全』一卷・五〇七頁

と述べられるように、仏教の教えとは、単に麁惡修善の教えでもなければ、受樂のための教えでもないのである。まさしくその穢土を勝過するところの浄土を、衆生に明らかにしようとするものだからである。韋提希は、この時初めて、此の世は自己が安んずることができない穢土と知り得たのであり、そしてそこに穢土を超えた世界を求める人間となれたのである。それは、穢土を超えたところの世界が、初めて韋提希自身の問題となったことである。

人間は、自分の状態や環境が自分の思いどおりに変化するということにおいて、苦悩が解決されると思う。そしてそのために様々な努力をする。善を修し行を励むということもなす。またそのことに破れもする。しかし、その自分が在るところの穢土の全体が「非常」なるものであり、自己が拠って立つ立脚地とはなり得ないものであるということが、人間には決定的に不明なのである。そのような「非常」の穢土に対して、一切衆生の救済を誓って建立された浄土は、「無生」「無為」と表されている。それは、人間を真に救済するものは、穢土の世界の内にあるのではなく、穢土を越えた世界にあるということを教えている。

韋提希はそのことに初めて気付き得たのである。善導は、阿弥陀仏の浄土を、唯心の浄土とか己心の弥陀ということ

に選んで、西方浄土として確かめている。また『観経』に説かれる定散二善は浄土を欣慕せしめるものであると表わしている。そこにおいて浄土は、願い求められるべき世界として確かめられている。人間は、穢土を穢土と知らず、それゆえに、穢土の中に救済を夢想していく。『観経』とは、そのような衆生の上に、穢土を超えた世界としての浄土を明らかにし、そこに救済の道を開いてゆく教えに他ならないと、善導は聞き取ったのである。

二 帰命ということ

「信巻」別序に示される沈迷の二機のふたつめは、「定散の自心に迷いて金剛の真心に昏し。」といわれるように、定散二善に迷うというところにおける問題である。

『観経』の定散二善は、衆生をして浄土を欣慕せしめるために説かれたのである。迷妄の穢土に執着してやまない衆生が、定散二善を勧励されるということにおいて、迷いを超えた世界を教えられ、その世界を願い求めるといふことを教えられていく。定散二善の教えには、このような大切な意味がある。それでは、定散二善を勧め励ますということに『観経』の根本精神があるのであろうか。善導はそうのように了解してゆかない。なぜなら、

上来、定散両門の益を説くと雖も、仏の本願の意を望まんには、衆生をして一向に専ら弥陀の名を称するに在り。

『真聖全』一巻・五五八頁

といわれるように、阿弥陀の本願の意を知らされてみれば、定散二善は称名念仏に帰せしむるために説かれたのであるからである。また、定散二善について、親鸞は、

しかるに常没の凡愚、定心修しがたし、息慮凝心のゆえに。散心行じがたし、魔惡修善のゆえに。ここをもつて立相住心なお成じがたきゆえに、たとい千年の寿を尽くすとも法眼未だかつて開けずといえり。

『真聖全』二巻・一五四頁

と、その修善が決定的に困難であることを述べている。なぜなら、その修善をなしてゆくのが常没の凡愚だからである。定散二善についての、善導と親鸞によるこのような了解を踏まえるならば、定散二善は仏によって勧励されることには違いないが、そのことに止まるならば、それは本願の本意を知らざるものであり、そして、常没の凡愚としての自己を知らざるものである。そこに、「金剛の真心に昏し」と示されるような、自覚の不徹底さがあるのである。

親鸞は、常没の凡愚が定散を修することは困難であると

述べている。それでは、その凡夫のために説かれた『観經』に定散二善が顯説されてゆくのはどういうことなのか。そのことについて親鸞は、

顯というは、すなわち定散諸善を顯し、三輩三心を開く。しかるに、二善三福は報土の真因にあらず。諸機の三心は自力各別にして、利他の一心にあらず。如来の異の方便、欣慕浄土の善根なり。

『真聖全』二卷・一四七頁

と述べている。そこではまず、二善三福は報土往生の真因ではないと言い切られている。それではなぜ凡夫に二善三福が勧励されるのかというと、衆生をして浄土を欣慕せしめてゆくという如来の方便なのであると述べられている。そこには二重の確かめがあるのではなからうか。すなわち定散二善は、報土の真因ではない。衆生に真実の浄土を顯するものではないのである。しかし、その定散二善において衆生は、浄土を欣慕するということを教えられてゆくのである。

定散二善は、如来によって勧励されるところのことがある。それでは、なぜそこには真実の浄土は開顯されてゆかないのであろう。そのことについて、親鸞は「諸機の三心は自力各別にして、利他の一心にあらず。」と述べてい

る。定散という自己の修善によって往生を目指してゆくというところにあるのは、自力の信心であり、他力の信心ではない。すなわち、人間の自力分別によるところの浅信であり、深い自覚としての深信ではないゆえに、真実報土の真因とはなりえない。確かにそこには、浄土に往生することを願う求むるという欣慕ということがある、それは穢土の衆生が穢土を超えた世界を求めてゆくという積極的な意味がある。しかし、定散の修善を支えていくものは、強固な求道心には違いないが、それは、人間を超えた世界を人間の努力・修善によって達成してゆこうとする人間の心であり、また、そうできるとする人間の思いである。それは、人間の自力分別の執心であり、自己と本願への深い目覚めをもたないものである。それゆえに、定散の修善における欣慕とは、自力の虚偽性を徹底して知らしめるところの、真実の世界に出遇うということのないままに、真実の世界を願う求めているというものである。それは、自己の無明の闇が徹底して破られるということがないまままでの願求である。そのような欣慕とは、

日ごろのこのころにては往生かなふべからずとおもひて、もとのこのころをひきかへて、本願をたのみまひらす

『真聖全』二卷・七八八頁

という回心をくぐらないままでの願求であり、

雑行を棄てて本願に帰す 『真聖全』二卷・二〇二頁

という「帰命」を欠落したところの願求なのである。その自力の浅信がひるがえされるということがなければ、真実報土の真因とはならないのである。それゆえに、浄土を慕い欣う心は、「雑行を棄てて本願に帰す」ということにまで、その目覚めを徹底されてゆくときに、真実報土の往生の道を開いてゆくものとなるのである。

『観経』に説かれる浄土の観法とは、

汝はこれ凡夫なり。心想羸劣にして未だ天眼を得ざれば、遠く観ることあたわず。『真聖全』一卷・五一頁

といわれる韋提希のための教えである。そして、如来はるかに末代罪濁の凡夫を知ろしめして

『真聖全』一卷・五一頁

といわれるように、徹底して凡夫のために説かれた教えである。その凡夫とは、

衆生散動して、識猿猴よりも劇しく、心六塵に偏して暫くも息むに由なき 『真聖全』一卷・四九八頁

という、散乱粗動の存在である。善導は、そのような凡夫であることに正直に『観経』の教えを聞いていったのである。そこに善導は、「上来、定散両門の益を説くと雖も、

仏の本願の意を望まんには、衆生をして一向に専ら弥陀の名を称するに在り。」という、阿弥陀の本願の意を聞き取っていったのである。そして、その本願の意を知らされてみれば、称名念仏こそ凡夫にとって唯一無二の道なのである。その決着において、「また、決定して、深く釈迦仏の『観経』に三福九品・定散二善を説きて、彼の仏の依正二報を証讀して、人をして欣慕せしむと信ず。」と述べられるように、定散二善は欣慕の善根として領かれていたのである。その欣慕の善根は、ついには凡夫をして念仏に帰せしめてゆくための教えに他ならないのである。それゆえに、浄土の観法について、

一には、衆生をして、境を識りて心を住せしめんと欲して、方を指すことと在ることあり。(中略)

二には、衆生をして、自の業障に軽重あることを識知せしめんと欲す。(中略)

三には、衆生をして、弥陀の依正二報、種種の莊嚴光明等の相、内外照曜して、此の日に超過せること百千万倍なることを識知せしめんと欲す。

『真聖全』一卷・四九九～五〇一頁

と述べられているように、浄土を教えられてゆくということとは、自己を教えられてゆくということなのである。真実

の世界が明らかにされてゆくということにおいて、真実ならざる自己が照らし出されてゆくのである。本願によって建立された浄土を教えられてゆくということは、本願によって救済されねばならないところの自己を教えられてゆくということである。そしてそのことの徹底において、凡夫の往生の道として念仏の一行を選び取られた本願の根本精神に帰せしめられてゆくのである。

本願との値遇における救済ということは、韋提希の得忍の問題においても窺うことがきよう。韋提希は広く憂悩のない世界を求めた。その願いに応じて、釈尊は十方の国土を現される。そのことをとおして韋提希は、別して阿弥陀の浄土を求めるところへと願いを深められゆく。聖道の諸師は、その十方の国土を親見するという光台現国において、韋提希は得忍したとする。しかし、善導は韋提希の得忍は光台現国のところではなく、華座観のところであると表す。すなわち、光台現国で浄土を見たところではなく、華座観で住立空中の阿弥陀仏を見たところで、得忍が確められるのである。それは、国土の親見ではなく、韋提希を救わんがために立ちたる本願の仏身に値遇して、その如来に帰命するということにこそ、韋提希の得忍があるということであり、そこに韋提希の救済の成就があるとい

うことであらう。

この本願の如来に帰命するということにおける衆生の救済ということは、下下品の機における「称南無阿弥陀仏」の称念念仏ということにおいて、徹底して明らかにされてゆくのである。下下品の機とは、浄土往生の善を修するこゝとができないのみならず、地獄に必墮する以外の何者でもない造惡の自己に苦悩する存在である。このような苦悩のなかに、善知識の教えによって念仏するものとならしめられてゆくのである。そのことは、遇教において、必墮地獄のその自己を救済せんがための本願の念仏に値遇するとき、そこに救済の有無ということを超えての帰命ということが人間に起こったということではないか。そしてそのような衆生に起こる帰命ということにおいてこそ、衆生に往生の道が開かれていくことであらう。

親鸞が、法然との出遇いにおいて獲得した信とは、

ただ念仏して弥陀にたすけられまひらすべしと、よき
ひとのおほせをかふりて信ずるほかに、別の子細なき
なり。
『真聖全』二卷・七七四頁

と述べられるように、「ただ念仏」の信心である。それは、帰命ということに摂尽される一心帰命の信である。その一心帰命の信は、内に深い願いをもつのである。天親は、そ

の願いを「願生安楽国」と表白している。その願生とは、
 帰命においてあるものであるゆえに、いたずらに気負い立
 って浄土を願求するというものではない。

浄土へいそぎまひりたきころのなくて、いささか所
 労のこともあれば、死なんずるやらんところぼそく
 おぼゆる
 『真聖全』二卷・七七八頁

という、煩惱具足の凡夫であるということに立ちながら、
 しかるに、仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫と
 おおせられたることなれば、他力の悲願は、かくのご
 ときのわれらがためなりけりとしられて、いよいよた
 のもしくおぼゆるなり。

『真聖全』二卷・七七七～七七八頁

と、どこまでも本願に帰してゆくというものである。本願
 とは、一切衆生が往生をとげないかぎり、自分は仏となら
 ないと誓い、願うものである。その誓願において、浄土を

莊嚴し、念仏を回向するものである。その本願を貫く、

たとい身を諸の苦毒の中に止くとも、我が行は精進に
 して、忍びて終に悔いじ。
 『真聖全』一巻・七頁

という志願に領くとき、人間は、自己のはからいを超えて、
 普く諸の衆生と共に、安楽国に往生せん。

『真聖全』一巻・二七〇頁

という深い願いを開かれてゆくのである。浄土を願生する
 という、自己を超えたところの願いを自己にたまわってゆ
 くのである。

このように、如来回向成就として衆生に發起する真実信
 心とは、帰命と願生ということを欠落した沈迷の二機に選
 ばれるところの、まさしく願生を内実とするところの一心
 帰命の信であるといえよう。

(本学専任講師 真宗学)

(平成三年十月一日受付)